

THE GRANPHONIC CONCERT 18th

グランフォニック第18回定期演奏会

30TH
ANNI
VERS
ARY!

愛知県芸術劇場コンサートホール

2025年6月7日(土)

開演4:00pm(開場3:30pm)

後援:愛知県合唱連盟

program プログラム

第一部

グランファーレ序曲

原詩：F.V.Schober 作曲：なりた まさと 指揮：成田正人 ピアノ：はやせ ようこ
15周年第10回演奏会を記念して作られた当団の開幕曲
芸術に、音楽に、心からの敬意と感謝を込めて

1st stage

「Spirituals(霊歌)」

Ride The Chariot / Deep River / Soon Ah Will Be Done /
Mary Had a Baby / Swing Down Chariot

指揮：小嶋 聡

2nd stage

「吹雪の街を」

忍路 / また月夜 / 夏になれば / 秋の恋人 / 夜の霰(あられ) /
吹雪の街を

作詩：伊藤 整 作曲：多田武彦 指揮：高津眞司

——— 休 憩(10分) ———

3rd stage

ワンステージメンバー参加ステージ

「追悼歌」(わがうた/第四曲) 作詩：北山冬一郎 作曲：團 伊玖磨

「岬の墓」 作詩：堀田善衛 作曲：團 伊玖磨

編曲/指揮：向川原慎一 ピアノ：はやせ ようこ

——— 休 憩(15分) ———

第二部

30周年記念ステージ「ふりさけ見れば遥かなる・・・」
～グランフォニック30年へのオマージュ～

創立30周年を記念した特別企画のステージ

当団誕生からの30年、Jポップを彩った名曲30曲のメドレー

1. はじまりの口上
2. メドレー 1994
3. メドレー 1995～1999
4. 地上の星
5. メドレー 2000～2006
6. 千の風になって／花は咲く
7. メドレー 2007～2024
8. なかじめの口上

企画：グランフォニック 構成・作編曲：なりた まさと 指揮：成田正人
ピアノ：はやせ ようこ ソプラノ：奥村育子 サックス：浅井ゆかり

舞台監督：磯田有香 舞台監督助手：鈴木絢子

ロビーマネジメント：OFFICEリラン

プログラム：加藤智彦 撮影：浜川忠宏 録画：スタジオ・ボンネット

liner notes 解説

～今度はSpiritualsです～

小嶋 聡

『今度は黒人霊歌です』

私が大学初年度の定期演奏会のパンフレット、北村協一先生の一言目にこう書かれていたのを思い出し、25年前の冊子を引っ張り出す。『...黒人霊歌ぐらい男声合唱をしている楽しさを教えてくれるレパートリーもそうざらにあるものではありません...』あの当時の先生の想いが少し分かった気がする。日本人の我々にとって感じるのが難しい背景、感情、そしてリズム。それらを一つ一つ解きほぐし、理解し、表現できるようになるに従い眉間のしわが目じりに移り、ある日突然ハモリだした時、団員たちに笑顔が溢れ出した。純粋に、心が音楽に反応し顔がほころぶ。中学のコーチをしていた時から約22年ぶりの出来事。そんな体験をさせてくれたSpirituals、私たちグランフォニックの音楽としてスピニアウトさせて、聴きにきてくださった皆様と共に笑顔になれることを願うばかりである。

さて、演奏会に向けての練習の雰囲気はこれくらいにして少し解説を。Spirituals(日本では十数年前までは「Negro Spiritual」、その直訳である「黒人霊歌」が一般的でしたが、差別的なニュアンスを含まない用語を使おうという意識の高まりから現在は「Spirituals」が使われています)は、アフリカ各地からアメリカ開拓のための奴隷として強制労働させられていた人々の中から生まれた音楽。与えられた旧約聖書に書かれた、迫害されていたユダヤ人の神の恵みによって救われる逸話に境遇を重ね、心の叫びが音としてリズムとして、魂の音楽として受け継がれています。

I. Ride The Chariot

信仰による勝利と天国への旅立ちへの希望をイメージした、非常に力強く喜びにあふれた曲調になっています。“I’m gonna ride the chariot in the morning”は直訳すれば「朝に戦車に乗る」ですが、苦しみからの解放の時が来るんだ! という希望を、奴隷である自分たちに置き換えて表現しようとしていたと考えられています。

II. Deep River

Deep River、すなわちJordan River(ヨルダン川)は約束の地への入り口、新たな生活への移行を象徴する意味として旧約聖書に書かれていますが、奴隷たちにとっては故郷への想いを馳せさせたり、現世の苦しみからの解放、安息の地・天国へのあこがれとしての境界と捉えていました。今回は、そんな心情を繊細に表している編曲を取り上げます。

III. Soon Ah Will Be Done

男声合唱では誰もが一度は歌ったことがある曲。現世の苦しみからもうすぐ解放される、という強い確信と希望を胸に、困難に打ち勝とうという精神的な支えとして歌い継がれてきた曲です。

IV. Mary Had a Baby

キリストの降誕を歌う喜びにあふれたChristmas Spiritualです。イエスの降誕は苦難の日々を過ごす人々にとっての希望の光であり、シンプルな歌詞、シンプルなメロディは時代を超えて現代の我々の心にも響いてきます。

V. Swing Down Chariot

原曲のSwing Low, Sweet Chariotをアレンジした曲として知られており、1960年代にエルヴィス・プレスリーもこの曲を収録し有名になりました。旧約聖書の預言者エリヤが戦車で天へ昇ることになぞらえ、死後の天国への希望、奴隷解放への希望、(南北戦争時代の)北部への逃避などを歌う原曲に加え、預言者エゼキエルが圧倒的な神の力を理解した様子が親しみやすい表現で描かれています。

今回、グランフォニックの定期演奏会では初めてBarbershopスタイルに挑戦します(Ⅳ、Ⅴ)。2000年前後から東京や関西で広がり浸透しつつあるBarbershop、まだまだ東海地域では聴き馴染みがないかもしれませんが、多くのお客様にこのBarbershopのワクワク感と、男声合唱としてのSpiritualsの楽しさをお届けできればと思います。

さあ、ショーの始まりです!



指揮者 小嶋 聡

千葉県出身。幼少よりピアノを始め、主に歌とヴァイオリンの伴奏を独学で学ぶ。大学進学後、慶應義塾ワグネル・ソサイエティー男声合唱団にて畑中良輔、大久保昭男、北村協一、綱川立彦、佐藤正浩各氏の薫陶を受ける。指揮を角田鋼亮氏に師事。大学・社会人合唱の傍ら、慶應義塾中等部コーラス部を約10年間指導。中等部生のために歌曲やミュージカル、J-POPなどジャンルを問わず数多く編曲、生徒たちに寄り添った楽曲として長く歌い継がれている。グランフォニックでは2012年より指揮を務め、2019年第16回定期演奏会では自身編曲の「レ・ミゼラブル」を指揮(共演：名古屋テアトロ管弦楽団／合唱団)。愛知県芸術劇場コンサートホールにフルオーケストラと共に『民衆の歌』が鳴り響いたことは記憶に新しい。

「吹雪の街を」～青春時代の淡い恋～

高津眞司

グランフォニックでは前々回の定演で「雪明りの路」を演奏しました。これは伊藤整が学生時代に書き留めたものを詩集として刊行し、多田武彦がその中から6曲を選び作曲したものです。そこには故郷である小樽の自然、風俗があらわされています。が、詩集「雪明りの路」の半数ほどは伊藤整が思いを寄せる女性についての恋の詩でした。その後およそ20年を経て多田武彦は「吹雪の街を」を作曲しますが、氏が「本当はこっちだったよな」と思われたかどうかは分かりません。

分かっていることは、平均年齢が60歳を超えるグランフォニック団員ですが、全て(?)のメンバーが女性について悶々とした青春時代を経験したことです。青春時代へのセンチメンタルジャーニーをお聴きください。

- I 忍路 冬にはスキーで、夏には小舟に帆を張って「浜風のなでしこのような」女性の住む忍路に通った。
- II また月夜 忍路の女性との恋が結ぶことはなかった。「二人が嘘についてゐたことがよくわかるだろう」
- III 夏になれば 唯一長調の曲で「嫁ぐ日になっても母となつてまでも」と、未婚の女性の幸せを祈る。
- IV 秋の恋人 また別の女性との恋で、二人は恋愛関係にあったが、秋が来て冬が近づくと「別れの予感」がもたげてくる。
- V 夜の霞 家族と住む幼い時期の思い出、薫を打つ父親の姿、その音を消す夜の霞の不気味さが歌われる。
- VI 吹雪の街を 4曲目で描かれた女性との恋も終わりを迎える。「歩いてきたよ吹雪の街を」を繰り返し歌われる。「十九の年に見た乙女のまなざしを私はかうしていつまでも忘れずにゐるのに」



指揮者 高津眞司

愛知県出身。刈谷高校のクラブ活動で合唱と出会う。慶應義塾ワグネル・ソサイエティー男声合唱団に入団、学生指揮者を務め、木下 保、畑中良輔両先生の薫陶を受ける。指揮を北村協一氏に師事。グランフォニックでは多田武彦の「東京景物詩」「雪明りの路」高田三郎の「心の四季」を指揮し好評を得る。

「吹雪の街を」 伊藤 整 詩

I 忍路

谷にそうて
枯れた林の傍をのめるやうに直滑降してから
僕たちは雪を蹴立てて
次ぎにjumping stopした。
そして目の下に
吹雪の忍路の村を覗いた。
また暑い八月には
紺の海を 小舟に帆を張つて
まじぐらに
静かな忍路の湾へのり入れた。
月夜にはよく足駄がけで歩いて通った。
忍路は蘭島から峠を越したところ
僕の村からも帆走出来るところ
そこに頬のあはいい まなざしの佳い人があつて
浜風のなでしこのやうであつたが

II また月夜

この月のひかりの中なら
どこまでも知らずに歩いて行くだらう。
ああ私の手や長い草に
燐のやうに反射してゐる やはらかい光
私ひとりではないやうな
誰かと歩いてゆくやうな明るい路
あんまり美しいので
手にとつて見てゐたいひかり。
こんな月のひかりの中で逢つたら
彼女はなんにも言はないで
私についてくるだらう。
二人が嘘についてゐたことがよくわかるだらう。

III 夏になれば

夏になれば みな浴衣で涼み
川すちの祭には 華やかな灯がつく
あそこの家にゐて
なにか寂しいときも 夜ねいる蒲団の襟にも
お使にあの坂路を下るときも
あなた自らさへ気づかずにつくる
あの笑顔の幸福さをなくしないやうに。
いつも鳩のやうに胸ふくらませて、
たまさか街で逢へば
何となく笑ましげに挨拶するあの素直な美しさを
生涯失はないやうに。
私はそのののために、
嫁ぐ日になつても
母となつてまでも
あなたを 心から祝福しよう。
街では誰もありがちな事だが
この世を私もしんじるために
あなたの笑顔にだけは不幸がうつらないやうに。

IV 秋の恋びと

木の葉はおしなべて散つてしまった。
秋はいたる所に
つめたし異人の瞳を覗かしてゐる。
瓜さね顔の まつげの黒い
ものの言はぬ恋びとよ。
お前はかずかずの思ひを燃やして
毎日 だまつて
私と人知れぬ目を交わす約束を忘れはしないが
あゝお前はその白い手を
何時になつたら私へさしのばすの。
秋はすっかり木の葉を落として
明日にも冬が海を鳴らしてやつて来るだらうに
お前はその思ひを
何時になつたら私に語るのだらう。

V 夜の霞

夜目にしろく 糸のやうに降りつむ霞。
屋根に跳ね 木々に触れ
さうして 凍った道に目立つて
外套の襷に積つて
あゝ さあつと林に吹き入つては鳴り
村を襲うた夜の霞。
障子にあかあかと燃え立つて映る
炬燵の大きい肩と 薫仕事。
その薫を打つ音 打つ音を消し
屋根を叩いて
霞は糸のやうに降りつんでゐる。
あゝ 夜目に白く煙つて。

VI 吹雪の街を

歩いて来たよ吹雪の街を。
言い出さねば
それで忘れたのだと思つてゐるのか
ゆかりも無かつたといへば
今更泣いても見たいのか。

あゝ 今宵吹雪が灯にみだれる街

女心のあやしき
いつかは妻となり 母となるべき身なのに
いづれ別れる若い日なのに
さりげなく言つてみないか。
その美しい日に思つたことを。
そのまなざしで思つたことを。
あゝ 譬へよもなく慕はしかつた
十九の年に見た乙女。

あゝ 吹雪はまつ毛の涙となる。

私はいつまでも覚えてゐるのに。
十九の年に見た乙女のまなざしを
私はかうしていつまでも忘れずにゐるのに。

greeting ご挨拶

本日はグランフォニック第18回定期演奏会にお越しくださり、誠にありがとうございます。昨年、当団は創立30周年を迎えることができました。これもひとえに、指揮者や伴奏・ソロをしていただいた先生方のご指導、演奏会の運営を助けていただいた多くの方々のご協力、そしていつも演奏会にお越しくださり、私たちを応援してくださるお客様方の支えがあったからこそと、心より感謝申し上げます。

1994年5月、東西四大学（早稲田・慶應・同志社・関西学院）の名古屋近郊在住のOBが集まり、演奏会を開催したのが起源となっています。その時のメンバー表を見ると、10名が今回もオンステしています。また、18回の定期演奏会すべてにオンステしているメンバーは6名います。皆、30年前は仕事では超多忙な時期であり、歌との両立はさぞ難しかったであろうと推察します。そうした状況においても、先輩方が情熱を持ち歌い続けてきてくれたからこそ、今日のグランフォニックがあるのです。当団もコロナの時期にはメンバーが40名弱となりましたが、着実に復活してきており、20歳代の若手も数名入団しました。三代に及ぶメンバーが歌でつながり、更なる高みを目指して、共に進化していこうと努力をしています。

これからもグランフォニックは「歌う喜び」「つながる想い」を大切に、次の40年、50年を目指して歩んでまいります。どうぞ今後とも温かいご声援をよろしくお願いいたします。

それでは、本日は最後までお楽しみください。

グランフォニック団長 中川 暢



history グランフォニック30年の歩み

1994年、グランフォニックの前身である「東西四大学OB合唱団東海」なるものが産声を上げました。その後、四大学OB以外のメンバーが続々と入団し、2000年、「グランフォニック」と改称し、現在全国20以上の学校のOBが集まる合唱団に成長しました。1年半ごとに1回定期演奏会を開催し、それ以外は、2000年の韓国演奏旅行、2005年の東京公演、名古屋の男声合唱とのジョイント、京都のアルシェ、上海グリークラブ、安城少年少女合唱団とのジョイント、合唱祭等で他団体との交流も行ってきました。昨年で創立30周年を迎えました。現在21の学校の主に男声合唱団OB、総勢54名で歌っております。

過去取り上げた主な曲は、オリジナル作品では「パパの子守歌」「玉照姫外伝」「エリーの青春」、演出ステージは「メリー・ウィドウ」「学生王子」「レ・ミゼラブル」、日本歌曲は「瀧廉太郎」「八木重吉」「淡彩抄」、外国語はシューベルト、マーラー、ブラームス、チャイコフスキー、トスティ、シベリウスとなっております。また畑中良輔先生、小林研一郎先生を客演指揮に招聘しております。



member オンステメンバー

団員 T1 伊藤高潤 鹿住 誠 小林 武 榎本真丈 高津真司 藤田東一
中川 暢 渡邊瑞樹 久野照之 天野甚一 礒田桂司 森 哲彦
小澤直樹 太田 薫

T2 石井 清 三ツ口勝弥 間瀬 譲 神谷立正 松浦治徳 大村 元
高橋淳一 石川周二 本多一義 栗林満裕 竹市史朗 岡島弘行
青山秀美 永瀬文雄

B1 細江太喜雄 黒田泰男 安田俊哉 稲熊裕之 松永鐘治 荒田 武
谷川昌隆 井坂太聞 米村壮和 渡辺敏和 越智康太 石原康行

B2 井ノ口貴敏 浅井良之 永井一美 松原成憲 村上 信 木村文隆
天野 浩 羽原知宏 松井則夫 武田睦夫 阿部健二 梅原 章

ワンステージメンバー T1 浅井裕之 安藤正和 小川 博 田中良夫

T2 神谷政宏 長谷川久夫

B1 吾妻信章 大木昌生 川本 保 澤田光隆 仁科正夫

団長 中川 暢

団長補佐 木村文隆 間瀬 譲

幹事 松浦治徳 栗林満裕 礒田桂司 久野照之 阿部健二

パートマネージャー T1 天野甚一 T2 大村 元 B1 荒田 武 B2 阿部健二

指揮者 成田正人 高津真司 小嶋 聡

副指揮者 浅井良之

パートリーダー T1 榎本真丈 T2 石川周二 B1 細江太喜雄 B2 梅原 章

技術委員長 礒田桂司

技術委員 永井一美 間瀬 譲 稲熊裕之 松井則夫

名誉団員・指揮者 向川原慎一

liner notes 解説

「追悼歌」と「岬の墓」の演奏にあたって

向川原慎一

「岬の墓」を作詞した堀田善衛は芥川賞を受賞している小説家ですが、国際的な視野を持って社会や歴史の様子を鋭く観察した評論家でもありました。一方、作曲の團伊玖磨は日本を代表するクラシックの作曲家で、オペラ「夕鶴」をはじめ幅広い分野で活躍し、歌曲や合唱曲にも多くの作品を残しています。そのコンビによって作られた混声合唱「岬の墓」は、これまで60年以上にわたって日本合唱界の名曲とされ、男声合唱用に編曲されたものも重要なレパートリーとして歌い続けられてきました。

この曲が作られた1963年は東京オリンピックの前年、高度成長期に突入しようとする時期で、日本全体が戦後復興を成し遂げた自信にあふれ、限りなく成長する未来に夢をふくらませていました。

そんな時代に「墓」をタイトルにした作品が生まれたのは何故でしょう。

まぶしい日差しの中で、小高い丘から見下ろすと、「白く美しい船」が大きな希望を持ちながら船出を待っていますが、その丘の上には暗い影を潜ませた「白い墓」が立っているのです。光と海と丘という視界の中で、未来につながる「船」と永遠の休らいを現す「墓」という二つの「白いもの」。そして詩の後半で「白い墓は美しい船を見つめている」というのです。「墓」に見つめられていてこそ、「船」は未来に旅立っていけるかのようです。

フランスの詩人ポール・ヴァレリーは「私たちはボートをこぐ時のように、未来に向かって後ろ向きに入っていく」と言いましたが、堀田善衛も「これまでの歴史や過去をきちんと踏まえた上でなければ、未来へは進んでいけない」という警告を発したのかもしれませんが。

「岬の墓」が作られた時から遡ること十数年前、終戦直後の1947年に團伊玖磨は北山冬一郎の詩による「わがうた」という歌曲集を作曲しました。この曲集の中には「ひぐらし」とか「紫陽花」など、多くの声楽家が好んで歌う傑作が含まれていますが、その4曲目が本日「岬の墓」の前に演奏する「追悼歌」で、太平洋戦争中、南の島の過酷な状況のもとで死んでいった友を痛切に悼んでいます。

そして「その魂が昇っていった空は、かぎりない美しさであった」という最後の部分で團伊玖磨が書いた音楽、その同じ和音が、十数年の時をはさんで「岬の墓」の冒頭で鳴り始めます。これが作曲者の意図的なものかどうかはわかりませんが、興味深いことです。

60年前とはいろいろな環境が大きく変わっていて、日本も世界も単純に未来を明るく見通せるとは限らない状況です。パンデミック、気候変動、人口減少、AI、戦争…めまぐるしい時代の波に漂いながら、それでも未来をめざしてエネルギーを持続しなければならない私たちは、何をよりどころとしたらいいのでしょうか。「岬の墓」の詩は最後に「岩の間に咲く赤い花に、われら何を聞こう…」と結ばれています。

空と海の「青」、墓と船の「白」そして最後に出てきた「赤」。

この謎めいた問いかけを噛みしめながら、精緻であり且つ壮大なスケールを持つ團伊玖磨の名曲に挑み、全力で歌おうと思います。



指揮者 向川原慎一（むかいがわらしんいち）

早稲田大学卒業。現在、グランフォニックをはじめ7つの合唱団で合唱指揮・指導している他、小学校の部活動にも携わっている。歌曲・合唱曲を中心とした作曲活動や、指導している団体の特性に合わせた合唱曲の編曲、依頼を受けた室内楽の編曲などによる作品は多数。2007年には奏楽堂 日本歌曲コンクール作曲部門中田喜直賞の部で、谷川俊太郎の詩「はる」に作曲した作品が最優秀賞を受ける。小林研一郎氏に師事。

lyrics 詩

「追悼歌」（わがうたより）

北山冬一郎 詩

兵士たちに
明日はなかつた
十字架は祈念であり
希みであつた
死は明るく匂ひ
祖国は海を遥かに千里
草と共に君は伏して
とはに動かなかつた
戦場よさらば
雲のうへ
魂は果なく昇つた
陽はそののちも
限りない美しさであつた

「岬の墓」

堀田善衛 詩

日は高く
海の辺の丘に
上つて見下せば
きららに光る入り江の青に
休らう 白い美しい船
紺碧の空から舞い下りて
水に休らう美しい船
日は高く 海に
丘の辺に影一つのことさず
岩の間に咲く 赤い花
日は高く 影を奪い
透明な海の風に
この岬の白い墓
美しい船よ
大いなる白鳥のように
休らう美しい船よ
翼をひろげ船出せよ
深く滑らかに輝く別の大洋をめざして
波の調べにゆられつつ
この丘の辺の白い墓
影一つない真昼の丘に
白い墓

その墓の下にこそ
永遠の休らいと暗い影
暗き休らいはあり
美しい船よ 白い船よ
船出せよ
彼方にひろき水平の
その彼方へと
白い墓よ
その石の裂け目から
暗い影なる休らいの
ことばを語れ
日は高く
真昼の海と
真昼の丘の辺に
永遠は光とたわむれ
風は何を語るや
海は波立つ
白い船 美しい船
白い 影なす墓の休らい
日は高く
丘の辺の白い墓は
美しい船を見詰めている
岩の間に咲く赤い花に
われら何を聞こう………。



ピアニスト はやせ ようこ

愛知教育大学音楽科卒業、同大学院修了。在学中より声楽の伴奏者としてステージを重ね、名古屋二期会や名古屋オペラ協会、三重オペラ協会など愛知、岐阜、三重のオペラ公演に多数参加。名古屋芸術大学でも長年オペラ授業に携わる。現在はプロの伴奏ピアニストとして声楽やヴァイオリンのソリストとのステージの他、合唱団の定期演奏会、声楽グループ「パッソ ア パッソ」音楽監督などで活動中。

liner notes 解説

「ふりさけ見れば遥かなる…」 ～グランフォニック30年へのオマージュ～

なりた まさと

「東海地方に男声合唱の新しい風を起こそう」と立ち上げた、グランフォニックの創団30周年を記念した特別企画のステージです。

今から30年前、皆さんは何をしていらっしゃいましたか?どのような日々を、どのような気持ちで暮らしておられましたか?また、それからの30年をどのように過ごして来られたのでしょうか?

30年というのは短くもあり長くもあります。個人であれ、家庭であれ、組織であれ、国際関係であれ、悲喜こもごも様々な事が起こります。ずっと順風満帆平穏無事に、というのは在り得ず、少なからず困難や苦痛に見舞われます。皆さんや皆さんの周りも同様でしょう。

グランフォニックにとっても、この30年は決して平坦な道ではありませんでした。印象的な演奏や感動的なステージを重ねながらも、団員の減少や老化に伴う合唱技術の劣化に抗い、未曾有のコロナ禍を潜り抜け、必死で藻掻いてきました。当然、団員個人の身上にもいろいろな事情が降りかかり、活動を継続するかどうかの決断を迫られることもあります。永眠された団員もおられます。

そんなこんなを経ながら、それでも私たちは仲間と共に練習を続けることができ、こうしてまたステージに上ることができています。これは、実は大変有り難く稀有なことであり、とても幸せなことなのではないかと想出した時、このステージの構想が降りてきました。

「地味になりがちな男声合唱に、女性ソロや楽器、更には動きなどを加え、お客様に喜んで頂けるようなエンタメ要素満載の、30周年記念にふさわしい華やかなステージに」という、団からの無茶振りに応えるには、お客様と共にこの30年を振り返るのが良いと感じたのです。

不思議なことに、歌は、その時代やその時の出来事の衣をまとして私たちの記憶に留まっています。この30年の流行り歌を聴くことで、いくつかの嬉しい記憶が呼び覚まされ、しばし幸せ感に浸れるかも知れないですし、苦難の時期を思い出して、今ここに在る幸せを再確認できるかも知れません。また、大切な思い出を噛み締める機会になるかも知れません。

それが、少しでも明日への“生きるエネルギー”になるのなら、私たちがこれからも歌い続けて行く元気の素にもなります。

ということで、グランフォニック前身の《東西四大学OB合唱団東海》が生まれた1994年から30年間で、日本ポップスのヒットチャート上位に名を連ねた歌を、ズバリ30曲集めてメドレーにしました。

全体を、①誕生の年、②《OB合唱団》時代、③④《グランフォニック》に改名後今日まで、の四つの期間に分け、メドレーの中には幾つかの「流行語大賞」言葉を配して、当時の様子を想起し易くしました。また、メドレーとメドレーの間にアカペラ単独曲を挟み込んで、若干の“気分転換”をしています。

尚、思い出に浸るのは嫌いだと仰る方は、本当に30曲が散りばめられているか、数えてみるのもまた一興かと存じます。それでは、タイムスリップを始めましょう。

biography 略歴



指揮者 成田正人(なりた まさと)

グランフォニック創設メンバーの一人。

慶應義塾大学在学中、木下保氏、畑中良輔氏らの薫陶を受けながら、指揮法を伊藤栄一氏に師事。合唱指揮の傍ら作詞・作曲・編曲に勤しみ現在に至る。編曲ものは数知れず、『パパの子守歌』『絵描きと少年』『太郎の愛』『ハーネスで握手!』『子犬のチロの物語』等、シナリオ起こしから作曲まで自ら手掛けた音楽物語形式の作品は20本を超える。雪の日の第14回定演で『詩人の恋』を指揮した翌日中国へ再赴任、上海グリークラブ(男声)や上海コールブラタナス(混声)の指揮者を務める。今般帰国し約9年ぶりにフランフォニックのタクトを執る。



ソプラノソロ 奥村育子

愛知県立芸術大学大学院を首席で修了。2012年度中村桃子賞受賞。大幸財団第22回丹羽奨励生。オペレッタ「こうもり」でデビュー後、現在、東海地方を中心にオペラ・オペレッタ、ミュージカル、コンサート等に出演する。また、後進の指導にもあたる。金城学院大学、同朋高等学校非常勤講師、もりっこ彩合唱団指導者。



サクソ 浅井ゆかり

名古屋芸術大学卒業。2014年、アメリカで毎年行われる全米最大級のパレード、ローズパレードに出演。2018年第1回大阪international音楽コンクールにて第1位を受賞。ドイツで行われたマスタークラスに多数参加。演奏活動の他、学校現場での教育にも愛を注いでいる。New moon saxophone quartetメンバー。一宮市レジデンスアーティスト。ナゴヤサクソフェスタ実行委員。



ヴォイストレーナー 鈴木健司

愛媛大学教育学部卒業。大阪芸術大学大学院博士後期課程修了。同大学院にて発声法についての論文を書き博士号を取得。歌唱を三原剛、松本美和子、W. Stephen Smithの各氏に師事。ドイツ歌曲を小林道夫氏に師事。第58回全日本学生音楽コンクール大阪大会1位。第6回日本演奏家コンクール学生部門一位、第7回大阪国際音楽コンクール学生部門2位、第46回なにわ藝術祭新人賞受賞。現在東海中学校音楽科教諭。東海高校男声合唱団顧問。愛知ロシア音楽研究会会員。愛知J.S.パッサ合唱団指導者。男声ヴォーカルユニットArteALTOメンバー。

THE
GRANPHONIC
CONCERT 18th